



千田 兼彦 with 歴史ロマン

歴史ロマンウォーク・埼玉通信 1

2020年5月11日



大貫先生の鎌倉情報（コロナ通信）第1号（4月20日）、切実な気持ちで読みました。「緊急事態」対応の日々が最短でも5月末まで。それぞれの立場・状況の中で皆さんも大変な思いをしておられることだと思います。「大貫通信」の続編のようなものですが私からも「ロマンウォーク埼玉情報」を遅ればせながらお届けします。何かの足しになれば、と思います。

<まずは、個人的なつぶやき>

近所を散歩していると、家々の入り口の「お札（護符）」が目にとまります。「室内安全」から「火の用心」まで、様々な神仏のお札。今は「悪疫退散」「病気平癒」が切実な思い。あらためて護符を求めて神社仏閣に足を運んだ人もいるでしょう。災害や疫病の流行に対して「お祓い」や「祈願」などで「対抗」する行為は、近代の科学思想から見れば、的外れで現実逃避の蒙昧な行いといえますが、異変に対して立ち向かい、解決・回避のためにあらゆる合理的な手立てを尽くしても、なお不安を払拭できないのが人間です。原始・古代においては真剣かつ切実だった呪術や神仏祈願が、現代の習俗としてなお消えずに残っているのは、その現れでしょう。我が家台所にも「愛宕」や「秋葉」の火防せのお札を貼っています。「注意喚起」や気持ちを落ち着ける手段として無意識に求めているのが、参詣・祈願・縁起物の世界なのかもしれません。「感染防御」の効果はともかくとして、病気や健康などに関する精神的な部分に関しては「信仰・信心」の役割は無視できないと思います。ただ、くれぐれも迷信・オカルトの世界にどっぷりとつかってしまうことは避けたいと思います。

<「地名」からみる神仏>

埼玉県の都市地図を眺めながら、町名（大字・小字）、そこから派生する学校や橋・交差点などにつけられた「神」の名前を探してみました。

①「八幡（ハチマン・ヤハタ）」②「伊勢（神明）」③「天神（天満）」
④「稻荷」⑤「熊野」⑥「諏訪」⑦「祇園（八坂・天王）」⑧「白山」
⑨「日吉（日枝・山王）」⑩「山（の）神」⑪「春日」⑫「愛宕」……
まだまだあります。（ ）内は神社の異称ですが、それも含めて埼玉県ばかりではなく全国で見聞きします。ここにあげた12の例は、全国で信仰別の神社数の多い順（2007年朝日新聞調査）です。

<祇園信仰=最強の疫神・牛頭天王>

「神仏に祈る」内容のNo.1はやはり「無病息災」ではないでしょうか。特に平安時代からの歴史をもつ「疫病退散」の

信仰が⑦の「祇園信仰」です。渡来の神とされる「牛頭天王（ごずてんのう）」が京都東山の祇園社感神院に祀られたのが始まりで、日本神話のスサノオノミコトと習合しながら、全国に勧請されていきます。神社名としては、祇園、天王、八坂、八雲、須賀などが知られています。スサノオを筆頭とする出雲の神の鎮座が共通点。愛知県の「津島神社」は東海・関東で広く信仰を集めたスサノオ・牛頭天王の神社。地名のついた神社も一皮むけば「祇園系」という例は各地でみられます。

ちなみに、仏様では病気平癒の「薬師如来」が一番でしょう。神仏習合・本地垂迹説では、薬師如来は素戔鳴尊の本地仏。祇園と薬師は不即不離ということですね。

<牛頭天王>

『本来はインド祇園精舎の守護神だが、わが国では祇園社（京都市東山区の八坂神社）に祭られ、スサノオノミコトに同一視されている。祇園社は、貞觀 18（876）年に藤原基經が疫病を鎮めるために牛頭天王を祭って造営したもので、その祭礼は祇園祭として有名。仏教の牛頭天王がスサノオと習合したのは、牛頭天王が道教の武塔神と同一視されていたため、この武塔神は『備後國風土記』（逸文）によれば、蘇民将来に一夜の宿を借り、その礼として疫病を免れる茅の輪を与えて「自分はスサノオノミコトである」と名乗ったという。人々は疫病を恐れ、その祟りを鎮める魔除けの神として牛頭天王（スサノオノミコト）に対する信仰が広まった。

（朝日日本歴史人物事典）』

「武塔神」は韓国で「ムーダン神」になり日本へ、という考察もあり、牛頭天王の渡来については韓国・朝鮮との交流史の中で考えていくべきテーマです。

<大宮・砂の万灯>

さいたま市見沼区砂町の八雲神社（天王様）で毎年7月14日に行われる「万灯祭り」は「祇園祭」です。「天王さん」や「八雲さん」の7月の祭りは京都の祇園祭とおなじものです。

<冰川神社と久伊豆神社>

先年の埼玉ウォークで、大宮氷川神社、鳩ヶ谷氷川神社、越谷久伊豆神社を訪ねました。参加された方、思い出してくださいだけますか？

実は、埼玉・東京地方に多数分布する「冰川神社」も、⑦の祇園信仰のなかに分類されています。祭神は出雲の神様です。

スサノオ・クシナダヒメ・オオナムチ(オオクニヌシ)。古事記・日本書紀など、文献によって漢字表記が違うのであえてカタカナで書きましたが、ちなみに、三神の表記は、古事記・日本書紀それぞれ以下の通りです。(『記』／『紀』)

須佐之男命／素戔鳴尊

櫛名田比売命／奇稻田姫命・稻田姫命

大穴牟遲神(大国主命)／大己貴命

なぜ出雲の神様が武藏国多くの神社に祀られているのかは、非常に興味深いテーマですが、いずれ別の機会にふれましょ。ただ、実体としての出雲勢力の東遷の結果であると短絡的に断定できないと私は考えています。これは、各地の地名分布を考えるときにも陥りやすい点だと、自戒をこめて思うところです。

「久伊豆神社」は、冰川神社の分布域の東側、埼玉県の東部の元荒川流域に集中的に分布しています。祭神はオオナムチ。その総本社とされる「玉敷神社」は加須市騎西(きさい)にあります。騎西は武藏七党の主力「私市(きさいち)党」が地名の語源とされ、さらに「ひさいづ」の語源も「きさいち」では?と考える余地はあると思います。



久伊豆神社 拝殿

冰川神社も久伊豆神社も祇園社のような直接の悪疫退散を「売り」にしているわけではありませんが、<牛頭天王>のところでふれた「蘇民将来」説話にある「茅の輪」が、6月末の「夏越しの大祓」(大宮冰川神社と同じく「武藏国一宮」をなめる「冰川女体神社」では「名越しの大祓」と言っています)の「茅の輪くぐり」に生きています。茅の輪くぐりは、全国的に広がっていて 6 月 30 日前後の参詣者にとっては意味深い民俗行事なのですが、今年は「3 密」の関係でどうなるなるのでしょうか。

<京都・紫野の今宮神社>

「今宮」は分霊して新たにつくった神社で「若宮」「新宮」と同様の神社名ですが、「あぶり餅」で有名な京都の今宮神社も、もともとは疫神(スサノオ)を祀る神社だったといわれています。11世紀初頭の疫病流行時に、疫神とともにオ

オナムチ・クシナダヒメ・コトシロヌシをあわせて祀り「今宮」としました。疫病流行のたびに「紫野御靈会」がおこなわれ、それが定着した今宮祭(5月)とならんで、もうひとつ「やすらい祭(やすらい花)」(4月)が、桜の散る季節の悪疫退散の祭りとして行われます。「鞍馬の火祭」「太秦の牛祭」とならんで「京の三大奇祭」のひとつですが、今年は、市中の行列練り歩きは中止、鎮疫の神事のみ、と新聞報道されました。



夜須良比花祭の図(黒川某氏所蔵)



やすらい花祭_花がさ



今宮神社_舞殿

江戸時代までの「疫病」の代表格は「天然痘(庖瘡)」と「コレラ(ころり)」でした。それに対して、1918～19年の「スペイン風邪」も新型コロナもウィルスです。細菌よりはるかに小さいウィルスが顕微鏡で可視化されたのは、なんと1930年代。(ウィルスが目視できない時代に野口英世は黄熱病研究の中で感染してしまいました) 病気がなんらかの祟りと考えられて「御靈会」がさかんに行われた背景には、やはり「目に見えないものの悪逆な威力」へのおそれがあったのでしょう。

現代の私たちはどう立ち向かうのか、日々考えます。

(つづく)